➢ イレジン（IRESINE）＝ フランス

せん６歳・黒鹿毛（フランス産・2017 年４月 15 日生まれ）
父：Manduro ＝ 母：Inanga（母の父：Oasis Dream）
馬 主 ： ベルトラン・ミリエール氏
調教師 ： ジャンピエール・ゴーヴァン
騎 手 ： マリー・ヴェロン
戦 績 ： 全 19 戦 13 勝、２着２回、３着３回
総獲得賞金 ： 約１億 920 万円
主な戦績 ： ’23 ガネー賞（G1） １着
’22 ロワイヤルオーク賞（G1） １着
’23 コンセイユドパリ賞（G2） １着
’22 フォワ賞（G2） １着
’21 ラクープ（G3） １着

イレジンはフランスで生産、調教された黒鹿毛の 6 歳セン馬です。血統は父がマンデュロ（その父モンズーン）、母イナンガはイギリスの人気種牡馬オアシスドリームの産駒です。

父のマンデュロは現役時にジャックルマロワ賞、イスパーン賞、プリンスオブウェールズステークスの G1・3 勝を含めマイルから中距離の重賞を 7 勝した名馬で、ドイツに縁の深い血統です。マンデュロの半姉のマンデラ（父アカテナンゴ）は独オークス 3 着馬で、繁殖牝馬として日本に導入され、菊花賞及び天皇賞（春）を制したワールドプレミアなど多くの活躍馬を輩出しています。母のイナンガはフランスでデビューして、未勝利のまま引退。4 代母にあたるリバークイーンは仏 1000 ギニー、サンタラリ賞、サンクルー大賞とフランスで 3 つの G1 を制した名牝で、5 代母のリバーサイド（父シェシューン）はロワイヤリュー賞の勝馬です。

フランス・ノルマンディーのピエール・ジョイヨ氏とマリールイーズ・ヴァン・デム氏によって生産されたイレジンは、2018 年のアルカナ・ドーヴィル 1 歳馬セールで、調教師のジャンピエール・ゴーヴァン氏に 6,000 ユーロ（当時約 80 万円）で落札されました。これはゴーヴァン調教師の顧客で長く共同で馬を所有してきた友人のベルトラン・ミリエール氏らと共有するためのものでした。

ゴーヴァン厩舎に所属したイレジンは 2 歳時に体調が整わず、3 歳時（2020 年 7 月）にデビュー戦（仏・ヴィシー、芝 2,000m）を迎えることとなり、ここはヤニック・フールナン騎手を鞍上に 12 頭立ての 3 着でしたが、同じ条件で 8 月に行われた 2 戦目をマリー・ヴェロン騎手で優勝すると、その後は順調に勝ち上がり、ベデル賞（仏・リヨン・パリイ、L、芝 2,400m）を 6 馬身差で制し、年を跨いで 6 連勝で重賞戦線に進みます。重賞初挑戦となったラクープ（仏・パリロンシャン、G3、芝 2,000m）では、5 番手から直線で進路を確保するのに手間取ったものの、最後は馬群を縫って抜け出し、ドバイワールドカップで 3 着だったマニークールを 3/4 馬身かわして優勝。マニークールから短クビ差の 3 着馬は後にジャパンカップに 2 度来日することになるグランドグローリーでした。続くヴィシー大賞（仏・ヴィシー、G3、芝 2,000m）は 2 番手につけますが、初めて背負う 60kg が堪えたのか、反応鈍くグランドグローリーに 4 馬身 3/4 差離れた 4 着となって連勝は 7 でストップしました。この年の最後のレースとなったフォワ賞（仏・パリロンシャン、G2、芝 2,400m）は逃げたディープボンドを捉えられず 3 着に終わり、そのまま休養に入ります。

5 歳を迎えたイレジンはクラス 2 戦（仏・リヨン・パリイ、芝 2,400m）とリヨン大賞（仏・リヨン・パリイ、L、芝 2,400m）を連勝。このクラスでは力が違うことを証明して重賞戦線に戻り、8 月のルー賞（仏・ドーヴィル、G3、芝 2,500m）3 着を経て、前年に続いてフォワ賞に参戦。6 頭立ての最後方の内を進み、残り 200m で外に持ち出されると、サンクルー大賞 3 着から臨んだバブルギフトをゴール前で一気にかわして快勝します。セン馬のため凱旋門賞の門戸を閉ざされていたイレジンは、シーズン終盤に行われるロワイヤルオーク賞（仏・パリロンシャン、G1、芝 3,100m）へ進み、

不良馬場を最後方で追走して直線に入ると満を持して脚を伸ばし優勝。愛セントレジャーを 2 度制したサーチフォーアソングに 3 馬身差をつけ、5 歳にして G1 初制覇を飾りました。

そして迎えた今シーズンは 4 月のアルクール賞（仏・パリロンシャン、G2、芝 2,000m）から始動、先に抜け出したシムカミル（2022 年ジャパンカップ 15 着）を後方から追いましたが 3/4 馬身差遅れをとって 2 着まで。しかし、続くガネー賞（仏・パリロンシャン、G1、芝 2,100m）ですぐに巻き返します。7 頭立ての最後方で待機して直線を迎えると、持ち味の末脚を存分に発揮して今度はシムカミルをきっちりとかわし、1 馬身 1/4 差で優勝。前年の英チャンピオンステークス覇者ベイブリッジ（3 着）、仏ダービー馬ヴァデニ（4 着）という強豪を退け、G1・2 勝目をあげました。

4 月末のガネー賞から 4 ヶ月半の休養を挟んだイレジンは、3 年連続でフォワ賞に出走。ここも 5 頭立ての最後方から差し切りを図りましたが、ガネー賞で 5 着に退けたプラスデュキャルゼルにクビ差届かず 2 着となりました。約 1 か月の間隔を挟んで向かった 10 月 15 日のコンセイユドパリ賞（仏・パリロンシャン、G2、芝 2,200m）は 9 頭立ての 7 番手から、直線で大外を強襲。残り 100m で抜け出すと 2 着のマルキザに 1 馬身の差をつけて重賞 5 勝目を飾りました。

イレジンの通算成績は 19 戦 13 勝で 3 着以内を外したのはわずか 1 度。勝鞍は芝の 2,000m から 3,100m に及び、重、不良馬場では 6 戦全勝。2,400m 戦は 8 戦して 6 勝、2 着 1 回、3 着 1 回。左回りは 7 戦 7 勝です。最新のワールドベストレースホースランキングのレーティングはドウデュースと同じ 120 です。

● **馬主：ベルトラン・ミリエール氏（Bertrand Millière）**

フランス南西部のローヌ・アルプに拠点を置く投資運用会社の代表。もともと祖父母が熱心な競馬ファンで、さらに兄弟が獣医師と結婚したこともあって自身も競馬に興味を持つようになりました。最初は繋駕速歩競走の馬を所有していましたが、その後は徐々に平地競走への比重を高めていきました。当初は、出走馬が売りに出されるクレーミング競走を通じて競走馬を購入していましたが、近年はジャンピエール・ゴーヴァン調教師の仲介のもと共有組織を組み、セリや庭先取引を通じて競走馬を所有しています。

ゴーヴァン師との関係は 15 年以上に及び、所有馬の多くを同厩舎に預託しています。その代表馬は本馬イレジンですが、それ以外にも 2022 年ラフォルス賞（G3）3 着のヴァルマーマジック、同じく 2022 年ベデル賞（L）勝馬のクールマスンなどがいます。

● **調教師：ジャンピエール・ゴーヴァン（Jean-Pierre Gauvin）**

1963 年 5 月 18 日生まれ。14 歳の時に繋駕速歩競走の騎手となるためにグライーニュの競馬学校に通いましたが、身体が小さかったこともあり両親が競馬の騎手への転身を勧めたため、アルベール・スワン厩舎で見習い騎手となります。その後、父が調教師ライセンスを取得しますが、調教の多くは自身で行っていたこともあり、怪我を契機に調教師に転身。師事したルイ・ブラー調教師からフランス中部のサン・シル・レ・ヴィーニュにある厩舎を買い取り、調教師としてのキャリアをスタートさせました。

その滑り出しは順調で 1997 年にイヴクリックでフェーユドレール賞（G3）を制して初重賞を飾ります。その後は重賞タイトルから離れますが、2012 年にサオノワでラフォルス賞（G3）、そして仏ダービー（G1）を勝って一躍その名を轟かせました。同馬はその後もニエル賞（G2）を制し、その年は 48 勝でキャリアハイとなるリーディング 8 位（獲得賞金順）となりました。以降の主な管理馬には 2014 年のコリーダ賞（G2）、15 年ドーヴィル大賞（G2）を勝ち、14 年のサンクルー大賞（G1）、15 年のロワイヤルオーク賞（G1）でともに 2 着となったシルジャンズサガ、19 年エドヴィル賞（G3）勝ちのプチフィスがいます。

2019 年以降はリーディング 20 位圏内を維持し、昨年は本馬によるフォワ賞（G2）、ロワイヤルオーク賞（G1）など 58 勝を挙げ、獲得賞金順で 13 位。今年は 11 月 14 日現在、本馬のガネー賞（G1）、コンセイユドパリ賞（G2）など 25 勝、780,630 ユーロでリーディング 31 位につけています。管理馬の日本出走は今回のジャパンカップが初です。

● **騎手：マリー・ヴェロン（Marie Vélon）**

1999 年 2 月 8 日生まれ、リヨン出身。5 歳の頃から家族と地元の競馬場に行くようになって競馬に興味を持ち、ポニー乗馬を開始。12 歳からは近郊のシャゼ・シュル・アンを拠点にするベルナール・グドー厩舎で経験を積み、その後 AFASEC 競馬学校へ進みます。アラン・ドゥロワイエデュプレ厩舎の見習いとして 2016 年にデビューし、その後現在のジャンピエール・ゴーヴァン厩舎に移って翌年 9 月に初勝利を挙げ、その年は 44 戦 4 勝の戦績を残しました。

続く 2018 年は 42 勝でリーディング 35 位、翌年は 40 勝でリーディング 32 位と女性騎手の中で頭角を現しました。2020 年には 84 勝を挙げて 2 年前にミカエル・ミシェルが樹立した女性の年間最多勝記録を更新し、リーディング 7 位に躍進。女性騎手として初のトップ 10 入りという快挙となりました。次いで 2021 年は本馬でラクープ（G3）を制して初の重賞タイトルを手にするなど 77 勝で女性騎手トップとなるリーディング 10 位、そして昨年は本馬で自身初の G1 勝鞍となるロワイヤルオーク賞（G1）を制するなど、リーディング争いの対象となる 3 月～10 月で 67 勝を挙げてリーディング 9 位と、トップ騎手としての地位を確立しています。

今年は本馬とのガネー賞（G1）、コンセイユドパリ賞（G2）を含む 729 戦 72 勝でリーディング 7 位でした。8 月にはワールドオールスタージョッキーズで日本初騎乗を果たし、第 3 戦で初勝利を挙げて総合 4 位。その際のエキストラ騎乗も含め、JRA 通算成績は 6 戦 1 勝です。